

〔朝鮮の美術展によせて〕

新羅の金製太環耳飾について

今回の朝鮮美術展で初公開される「金製垂飾」は大小八対から成っておりますが、その中で法量（ほうりょう）が最も大きく、しかも最も精巧な造作をみせる一対（カット①）を、その類品と比較、対照しながら紹介させていただきます。

普通このような作品は表題のように「耳飾」と呼称されていますが、ただ耳たぶに付ける環の太い、いわゆる太環（式）耳飾は耳飾としてばかりでなく、一般的な装身具として金冠にも下げたり、また最も喜ばれたプレゼントや奉納品として使われた形跡がありますので広く垂飾と言った方が適切かと思われます。

三国時代の新羅、いわゆる古新羅の古墳関係工芸品として、最も注目を引くのは純金製品であり、最盛期の新羅の国力はこのような純金装身具でもって象徴されているようです。それは当時の日本人が新羅を「目の輝く」という形容詞を付けて呼んだことでも示されています。新羅での細金細工は、楽浪の滅亡による楽浪系工人の移住によって始まったと考えられています。洛東江の上・中流域には砂金が多いので、採金は新羅王族の独占事業となり、それが鉄と共に新羅王朝の経済的基盤となっ

たようです。そして金、特に純金の使用は身分によって規制され、純金の冠・耳飾・鈔帯（ちようたい）などは新羅王の身分的象徴物となりました。

新羅の古墳の中で、ある程度以上の規模を誇る古墳からは必ずと言ってよいほど純金製耳飾が出土しています。例えば慶州・皇南大塚の北墳からは数十組の耳飾が一度に出土しているなど、これまでにあっての新羅地域から出土した耳飾は恐らく千をはるかに越えるだろうと言われていています。これらの新羅の耳飾は、先に一寸ふれましたが、耳たぶに下げる輪の太さ細さによって、太環式と細環式の二種類に分類されていますが、そのどちらの形式にしてもその全体の基本的構造は同じで、耳につける環と中間飾、そして垂下飾の三つの部分から成立っています。

太環式、細環式ともに高句麗から始まったと考えられますが、それが新羅に入ってから一層多様化し、特に中間飾の形態が独特な発展をして、5世紀から6世紀にかけて完成しました。新羅の耳飾の基本的形態は、中間飾が透し彫りの球形であり、垂下飾は心葉形（ハート形）を使うのが普通です。慶州市の普門洞夫婦塚から出土した「金製太環耳飾」（カット③）

は太環と楕円形遊環の表面を亀甲形と三花形を鍍金細工で装飾し、小さな環珞と心葉形垂下飾にも細金粒を蟻附するなど、新羅時代の太環耳飾の中では最も精巧にして優美な作例で、長さは8.7センチあり、国宝90号に指定されています。

この作品は新羅細金細工の代表作とも言えますが、これに優るとも劣らぬ傑作が東京国立博物館の旧小倉コレクション中にあります。形状や大きさは両者ほとんど同じですが、夫婦塚出土のものより垂下飾の心葉形の細粒文様だけがより複雑、精緻なのです。ただ、一個しか遺っていないのが残念です。

なお、太環式耳飾は、針金状の環（細環式）の代わりに、薄く伸ばした金板を筒形に曲げて作ったもので、環の一端が細環式のように間が離れていますが、その隙間があまりに狭くて、これをどうやって耳につけたのかは実際よく判かっていません。

当館所蔵の耳飾の説明が遅くなりましたが、本品は純金の主環と垂下飾には鍍金装飾が施され、遊環にも同様の技法で結縛陰文が加飾されるなど、文様の変化に調和を見せて、美事な効果を上げています。制作期は5世紀後半から6世紀初頭にかけての頃と考えられますが、耳環の形や垂飾の形から見て古いところに属し、5世紀前半代まで上がるのではないかと専門家の意見もあります。また、連繋金具に兵庫鎖が用いられているところから推測して、新羅のものとするよりは伽耶地方のもの、

それも梁山・陝川のような内陸伽耶、新羅の版図に近いところの伽耶の産ではないか、との意見も頂戴しております。

なお、本品の類品としてカット②の作品（宝物557号）が挙げられますが、余りにもよく似ている点から両者は恐らく同じ古墳からいつしか出土したものと考えられます。この2点とも出土地が未詳ですが、当館の作品はただ奈良県下の旧家に伝世したものであることだけが知られています。

カット②の作品は垂下飾の形態から見るとカット④のものに近く、鍍金装飾から見るとカット③の作品に近似しており、長さが9センチあります。

カット④の作品は、慶州市の路西洞215号墳出土で、長さは9センチ、宝物455号に指定されています。なお、韓国の〈宝物〉は〈国宝〉に準じるクラスのもので、日本の〈重要文化財〉に該当します。本品は装飾の全くない太環に楕円形の遊環を連結し、その下の中間飾は心葉形の小さな環珞で構成し、二段に配置しており、下端にはペン先形の装飾を垂らしています。環珞の付いた中間飾と垂らしたペン先形には鍍金による装飾が見られます。

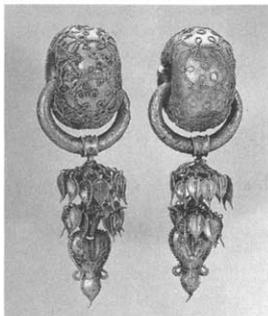
以上、当館所蔵の作品を中心に新羅の金製太環耳飾の名品をいくつか紹介いたしましたが、それらの中では当館の作品が長さ12センチという最大のものであることを最後に申し添えます。

（吉田宏志）

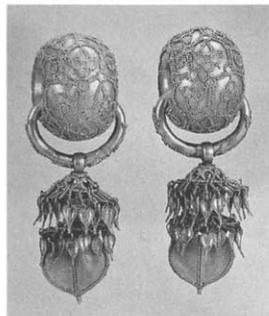
①・大和文華館蔵



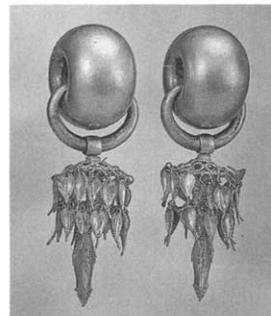
②・韓国 湖巖美術館蔵



③・韓国 国立中央博物館蔵



④・韓国 国立中央博物館蔵



季刊 美のたより No.111

平成7年5月18日

発行 大和文華館